

いけばなにおける植物の生：いけ手を介して自らを実現する

柳川 太希 (成城大学)

いけばなは「はな」を「いける」営みとその所産を意味する。この「いける」は「生ける」ないし「活ける」の字が当てられる。このいけばなを芸術形式として見るとき、従来のいけばな研究は生ある植物を素材とするのがいかなることかを検討していない。そこで本発表は、いけばなにおける植物の生とは何か、を問いとする。この問いを、植物の生に関する哲学的議論の中で代表的なエマヌエーレ・コッチャ[2016]の研究を検討し、それをいけばなの実践に応用する仕方で解決する。

コッチャによれば、植物の生と動物の生の相違点として、動物は自身の生を保つために他の生を前提とするが、植物は石や水、空気や光といった世界の最も基本となる構成要素さえあれば生を保てる。コッチャはその世界において異なる実体や対象同士の相互作用で生み出される結合の形態に言及し、各々の構成要素やその性質を保ちながら互いに場所を占め、溶け合うことなく混合すると述べる。植物の場合、物理的な移動はしないが内在する動力を有し、呼吸によって自身以外の事物と混合し身を浸す。この浸りが相互浸透という作用で、主体と環境、物体と空間、生命とその環境は相互に働きかけ、その相互作用を通じて自らを明確にする。コッチャによれば、植物は主体として他のものと混合し、自らを明確にする生命である。

この議論をいけばなに応用してみよう。自生している植物が鋏で切られたとき、動物と異なりそれが即、死を意味するわけではない。植物の場合、生を保つ一方で養分の摂取が根ではなく茎の先端からとなり、自らを構成する要素に変化が生じる。いけ手は自生していたときと変化を異にした植物に対し、まず水切りによって水揚げを良くし、次にこの植物に内在する変化の原因を看取り、植物が変化しようとするその先を見据えて形を整えることで、植物の生を明確にする。例えば冬に、自生している蕾の状態の椿を切り取ったとする。自生していたときは隣り合う椿同士が花を開く際に接触して互いの生の実現を妨害し合うかもしれないが、いけ手は椿の花が開くことによって割かれる面積を予め確保する設えを施すことで、その椿は自生していたときとは異なる、より良い生を実現する。椿は自らの変化の原因を蕾や葉の位置と枝の重心の位置でいけ手に示し、いけ手が自身の構想を更新しながら椿の向きを調整し、椿の生を明確にしていく。椿といけ手はこうした相互作用を通じて椿の生といけ手の構想を実現する。

いけばなにおける植物の生とは、自生していたときと変化を異にした自らの生を、いけ手を介して実現する生である。それはいけ手の側から見れば、植物の生を明確にする

ことが植物を生かす（活かす）、つまりは植物の生を実現するということを意味し、「いけばな」という語の意味とも符合する。いけばなにおける植物は単なる受け身としての素材ではなく、主体としていけ手に働きかける存在である。